

## 真理を話す方

ヨハネの福音書 8章 39-47 節

### はじめに

今日の聖書箇所には、イエス様と「**ご自分を信じたユダヤ人たち**」との対話が書かれています。イエス様が説教をされると、多くのユダヤ人たちがイエス様を信じたのです。しかしイエス様はそのご自分を信じたユダヤ人たちに、とても厳しい言葉を語られるのです。「**あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当の弟子です**」(8:31)とか、「**罪を行っている者はみな、罪の奴隷です**」(8:34)など。つまり「あなたがたはまだ本当の弟子ではない」「あなたがたはまだ罪の奴隷だ」と言われるのです。

そのイエス様の厳しい言葉に、ユダヤ人たちは反論するのです。「**私たちの父はアブラハムです**」「**私たちにはひとりの父、神がいます**」と。彼らは、自分たちは神様に選ばれた特別な民族だというプライドがありました。自分たちは誰の奴隷でもない、自分たちは特別な民族だと思っていたのです。

### 1. アブラハムの子どもとは

ではイエス様は、そんな彼らに何と言われるのでしょうか。39-40 節を見てみましょう。「**彼らはイエスに答えて言った。『私たちの父はアブラハムです。』イエスは彼らに言われた。『あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行うはずです。ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに語った者であるわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことをしませんでした』」。**

アブラハムとは、ユダヤ人の先祖であり、ユダヤ人はこのアブラハムから生まれました。神様はアブラハムを選び、アブラハムを通してイスラエルの民、ユダヤ民族を作られたのです。ユダヤ人たちは、自分たちの父はアブラハムだ、自分たちはアブラハムの子どもだということを誇りとしていました。

8:37 を見ると、イエス様も、彼らの父はアブラハムで、彼らはアブラハムの子どもであることを認めています。しかしイエス様は、彼らはアブラハムの子どもらしくないと言われるのです。なぜなら、彼らは「アブラハムのわざ」を行っていないからです。彼らが行おうとしているのは、イエス様を殺すことです。イエス様が神様から聞いた真理を一生懸命に語っているのに、彼らはイエス様を殺そうとしているのです。アブラハムは決して、神様から遣わされた人、神様から聞いた真理を語る人を殺そうとはしませんでした。

創世記 18 章を見ると、ある時、アブラハムのもとに神様は現れました。マムシの櫛の木のところです。アブラハムにとっては、その姿は三人の人のように見えました。アブラハム

は、その三人の人を見ると、地にひれ伏して彼らを迎え、食事のもてなしをしました。アブラハムは、神様ご自身を、そして神様から遣わされた人を喜んで迎え、受け入れました。これが「アブラハムのわざ」です。神様から遣わされた人を喜んで迎え、受け入れることこそ、「アブラハムのわざ」なのです。しかしユダヤ人たちは、神様遣わされたイエス様を、殺そうとしていたのです。「アブラハムのわざ」と全く正反対のことを行おうとしていたのです。その意味でイエス様は、「あなたがたは本当の意味で、アブラハムの子どもではない」と言われるのです。

使徒パウロも、こう言っています。「**イスラエルから出た者がみな、イスラエルではないからです。アブラハムの子どもたちがみな、アブラハムの子孫だということではありません**」(ローマ 9:6-7)。「アブラハムの子ども」というのは、血筋とは家系ではないと言うのです。では、誰が本当の意味で、「アブラハムの子ども」なのでしょう。パウロによれば、それは「信仰によって生きる人」です。パウロは、こう言っています。「『**アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた**』とあるとおりです。ですから、信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である、と知りなさい。聖書は、神が異邦人を信仰によって義とお認めになることを前から知っていたので、アブラハムに対して、『**すべての異邦人が、あなたによって祝福される**』と、前もって福音を告げました。ですから、信仰によって生きる人々が、信仰の人アブラハムとともに祝福を受けるのです」(ローマ 3:9)。アブラハムというのは、「信仰の人」なのです。その意味で、「信仰によって生きる人」が、本当の意味で、「アブラハムの子ども」であり、神様によって選ばれた人なのです。それは、ユダヤ人も異邦人も関係ありません。日本人も韓国人も関係ありません。人種や国境を越えて、ただ「信仰によって生きる人」こそが、「アブラハムの子ども」であり、神様によって選ばれた特別な人なのです。

では、「信仰」を持てば、何でも良いのでしょうか。何を信じててもよい、信じる心が大切なのでしょうか。そうではありません。何を信じるかが大切なのです。イエス・キリストを信じることこそ、「アブラハムの子ども」であることの条件なのです。イエス様を、唯一の真の神であると信じる人、その「信仰によって生きる人」こそ、本当の意味で「アブラハムの子ども」であるというのが、イエス様のメッセージであり、パウロのメッセージなのです。その意味で、イエス様を殺そうとする人は、たとえユダヤ人であっても、本当の意味で「アブラハムの子ども」ではないとイエス様は言われるのです。

## 2. 神の子どもとは

するとユダヤ人たちは、41 節で続けて反論します。「**私たちにはひとりの父、神がいます**」。彼らはイエス様に、「アブラハムの子ども」であることを否定されると、今度は「私たちの父は神様だ」「私たちは神様の子どもだ」と言うのです。

しかしイエス様は、42 節で再び彼らにこう言われます。「**神があなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずで、わたしは神のもとから来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わされたのです**」。イエス様は、「神様の子ども」なら、イ

イエスを愛するはずだと言われます。なぜなら、イエスは、神様から遣わされた方だからです。「神様の子ども」ならば、神様がなされるすべてのことを喜んで受け入れるはずです。

I ヨハネ 5：1 にも、こういう言葉があります。「**イエスがキリストであると信じる者はみな、神から生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はみな、その方から生まれた者も愛します**」。「神様の子ども」は、「イエス様こそキリストである」と信じるのです。逆に言えば、誰でも「イエス様こそキリストである、救い主である」と信じる人は誰でも、「神様の子ども」となれるのです。それゆえ、「神様の子ども」はみな、神様を愛し、同時にイエス様をも愛するようになるのです。

しかしユダヤ人たちは、イエスを愛しませんでした。むしろイエスを殺そうとしました。それゆえに彼らは、本当の意味で「神様の子ども」ではないと言われるのです。「アブラハムの子ども」であるかどうか、「神様の子ども」であるかどうか、それは決して血筋や家系、民族によるものではありません。それは、イエス・キリストという方をどう見るかに懸かっているのです。イエス・キリストは、神の子かそれともただの人間か、また、救い主かそれともただの罪人か、この方をどう見るか、この方への信仰によって生きるかどうか、この方を愛するかどうかにかかっているのです。

### 3. 悪魔の子どもとは

では、ユダヤ人たちは、「アブラハムの子ども」でもない、「神様の子ども」でもないとしたら、一体、誰の子どもなのでしょう。イエスは 44-45 節で、こう言われます。「**あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです**」。

イエスはここで、とても厳しいことを言われます。「あなたがたはアブラハムの子どもではない、まして神様の子どもでもない、むしろあなたがたは悪魔の子である」と言われるのです。

「悪魔」というのは、創世記の始めから存在しています。悪魔は、アダムとエバを誘惑し、彼らを霊的な死に追いやりました。つまり神様との交わりを断絶させました。また悪魔は、彼らを肉体的な死に追いやりました。彼らは神様の命令に背いたことによって、肉体的に死ぬ存在となったのです。そして、彼らを通して、全人類が霊的にも肉体的にも死ぬべき存在となったのです。その意味で、44 節にあるように、「悪魔は初めから人殺し」なのです。悪魔は、人を死に追いやる存在なのです。神様から人間を引き離そうとする存在なのです。

また悪魔は、「偽り者」です。「偽り」とは、「真理」の反対語です。悪魔には、真理はありません。真理に対立することこそ、悪魔の本質なのです。ですから悪魔は、アダムとエバは、「**あなたがたは決して死にません。それを食べるとそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです**」(創世記 3:4-5)と言って、「偽り」を言い、全人類を死に追いやりました。「偽り」と「人殺し」、それこそ悪魔の本質なのです。

聖書は、悪魔の存在を認めています。神様が存在しているように、悪魔も存在している、そのことを私たちは信じなければなりません。

イエス様は、ユダヤ人たちを「悪魔の子ども」だと言われました。そして、「あなたがたは悪魔の子どもだから、真理を語るわたしの話が分からないのだ、わたしのことばに聞き従えないのだ」と言われるのです。また「あなたがたは悪魔の子どもだから、わたしを信じず、わたしを愛さず、わたしを殺そうとするのだ」と言われるのです。

## おわりに

今日の聖書箇所を通して、イエス様は何を言おうとされたのでしょうか。イエス様は、ご自分を信じたユダヤ人たちに語られました。彼らは、律法を厳格に守る人たちでした。そして、自分たちこそ「アブラハムの子ども」である、「神様の子ども」である、と信じて疑いませんでした。しかしイエス様は彼らに、「あなたがたは『悪魔の子ども』である」と言われたのです。「アブラハムの子ども」は、イエス様への信仰によって生きるからです。また「神様の子ども」は、イエス様を愛するからです。

イエス様によれば、そもそも彼らはイエス様を信じていなかったのです（45、46節）。彼らはイエス様の奇跡を見て、イエス様の説教を聞いて、表面的にはイエス様を信じているように見えました。しかし彼らは、イエス様のことばに聞き従うこともせず、イエス様を愛することもせず、むしろイエス様を殺そうとしていたのです。それは、イエス様が真理を語ったからです。「悪魔の子ども」の本質は、人殺しと偽りです。ですから真理に対して敵意を持つのです。そして、真理を抹殺しようとするのです。

今日の聖書箇所でも思われることは、私たちにとって大切なことは、私たちは一体、誰の子どもとなり、誰の子どもとして生きていくのかということです。イエス様は、ユダヤ人たちは「悪魔の子ども」であるから、イエス様の話が分からない、イエス様の言葉に聞き従えない、イエス様を信じられないと言われます。つまり私たちは、誰の子どもになるかで、その人の行いや生き方が変わってくるのです。私たちは、自分の行いや生き方を変えようと思っても、自分の力では変えられません。私たちは、「悪魔の子ども」になれば、真理に敵対して生きていくことになるのです。そして、「神様の子ども」になれば、信仰によって生き、イエス様を愛し、イエス様の言葉に聞き従えるようになるのです。私たちは、誰の子どもとして生きていくかが大切なのです。行いや生き方は、後からついて来るのです。

「ヨハネの福音書」は、初めにこう語っています。「**この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった**」(ヨハネ 1:12)。イエス様を信じれば、誰でも「神様の子ども」になれるのです。イエス様を神の子、救い主と信じれば、私たちは新しく生まれ変わります。新しく「神様の子ども」としての人生が始まるのです。そして、イエス様の話が分かるようになり、イエス様の言葉に聞き従い、イエス様を愛するようになるのです。私たちは、表面的な行いや生き方を変えるのではなく、抜本的な、誰の子どもとなるのが大切なのです。そうすれば必ずと行いや生き方は変わっていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされたイエス様を信じ受け入れる人は、誰でも「アブラハムの子ども」とされ、「神様の子ども」とされます。血筋や家系、民族ではなく、また善い行いによるものでもありません。イエス様への信仰こそ、誰の子どもとなるかを決定的に分けるただ一つのもので、「どう生きるか」よりも、「誰の子どもとして生きるか」をまず真剣に考えさせてください。どうかここにいる一人ひとりを「神様の子ども」として生かしてください。そして、イエス様の言葉に聞き従い、イエス様を愛する者へとお導きください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。